

希薄化するディレクターの存在

テレビに元気がない。その理由は、さまざま考えられる。ネット普及に伴うテレビ広告費の減少、動画配信サービスに奪われる視聴者、そして番組制作費の削減……。このような環境下で筆者が危惧するのは、表現者としてのディレクターの存在がプロデューサーの陰に隠れて希薄になっていることだ。

本来、プロデューサーとディレクターには別々の役割がある。プロデューサーはマネジメント業。金庫番でもある。そして、ディレクターは演出という創作業務を担う現場の指揮者だ。いわば映画の監督と同様の職能である。

筆者は四十年ほど前からテレビ業界に身を置いてきた。かつては役割分担がはっきりしていた。生放送中のスタジオでプロデューサーが演出に口を挟むと「黙っている」と怒鳴るディレクターがいた。そこには、より良い番組にするために現場を仕切るディレクターの自負があった。もちろん、予算の壁やコンプライアンスの問題はある。行きすぎに歯止めを掛けることはプロデューサーの

P テレビを創るのは誰なのか



竹林 紀雄

役割だ。ただし、両者に上下関係はなく、いい意味での緊張感があつた。

ところが、今は財布を握るプロデューサーの力が圧倒的になっていく。話題の番組がメディアの取材を受ける場合、登場するのはテレビ局のプロデューサー。業界用語でいう「局P」で、番組の顔はプロデューサーとなっている。

最近、番組制作会社に就職した筆者の教え子から相談を受けた。アシスタントディレクターを務めて五年になるが、ディレクター昇進の話を断りたいという。ディレクターは「やりたいことはできないし、現場

では板挟みになって大変」が理由だ。

✓ 本来は並列関係

その背景にはテレビ業界が抱える構造的な問題がある。番組制作には、現実問題としてテレビ局を頂点とするヒエラルキーがある。最終決定権者として局Pがいる。外部の番組制作会社のディレクターは、その下にいる。番組制作においてプロデューサーとディレクターは並列関係にあるべきなのだが、そこには発注元のテレビ局と受注先の制作会社という制作費の流れがある。さらにいえば、著作権は人であるディレクターには与えられず、法人であるテレビ局等が持っている。

ひと昔前になるが、テレビ東京系列に「ドキュメンタリー人間劇場」という番組があった。プロデューサーは「人間を描いて欲しい」「独創的な作品を」と言っただけで、ディレク

今はプロデューサーが主役

ターの作家性を尊重してくれた。企画のコンペティションには名だたる映画監督も参加し、放送文化基金賞など数々の賞も受けた番組だ。筆者の企画が採用され、放送当日の新聞のテレビ欄に「演出 竹林紀雄」とあり、それを見たときの高揚感は今もよく覚えている。作家性を認められ、自分の名前で勝負できることを意識に感じないディレクターはいない。合理化、効率化のしわ寄せは現場のディレクターに集中しがちだが、番組の面白さは「創作」著作」に取り組むディレクターの力量にかかっている。であれば、創意や表現の観点から、その貢献度に応じた著作に関わる権利の配分について考えることも今後の課題である。本来、ディレクターはプロデューサーの部下ではない。番組を創作するのは誰なのか。より面白い番組を創るためには、ディレクターが表現者として制作上の裁量権を持ち、誇りを持って力を発揮できる体制作りが重要だ。もちろんディレクターには、その責任を背負う覚悟が必要なのは言うまでもない。

(たけはやし・のりお＝文教大学教授)